

## 保育ソーシャルワークにおけるアセスメント・ツールの開発に 関する研究

### ーコンピュータ教育支援ツールによる実践的展開と検証ー

#### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ヤマシロ ヒサヤ 山城 久弥
所属等	鎌倉女子大学 児童学部 講師
プロフィール	病院や障害者支援施設、児童相談所などの福祉現場を経験し、現在は大学で保育士養成に関する社会福祉領域の教科目を主に担当している。 研究としては、保育現場におけるソーシャルワークをどのように機能させ、子どもや保護者を含めた家庭全体の支援の方法について検討している。

#### 1. 研究の概要

現在の保育現場では、保護者の子育て不安や貧困、地域社会での孤立など、様々な家庭問題に対する対応が求められている。こうした複雑かつ多様な家庭問題に対し、保育所や保育士は、「ソーシャルワーク」の機能を活かした支援を行う必要性が高まっている。

しかしながら、現在の保育現場において、ソーシャルワークの支援およびその方法について、具体的かつ有効な手法はほとんど見当たらず、また、保育士に対するソーシャルワークのスキルを身につけるための教育や研修体制等も十分とはいえないのが現状である。

こうした課題に対し、本研究では、筆者がこれまで開発してきたアセスメント・ツール（教育支援ツール）を、保育現場に従事している保育士 36 名を対象に試行し、ソーシャルワークに必要な支援スキルの理解や実際の保育現場での有用性について、実践的な展開において検証を行った。

その結果、①子どもやその家庭を全体的に理解するための視点や実際に支援を展開していくうえで必要となるソーシャルワークのスキルの理解が促進されたこと。②アセスメント・ツール（教育支援ツール）の保育現場での有用性について、高い評価を得ることができた。

#### 2. 研究の動機、目的

##### (1) 研究の動機

近年、都市化や核家族化、女性就労の増加などによって、家庭や地域社会における子育ての機能が低下し、子育ての孤立や負担の増大、児童虐待などの様々な家庭問題が生じている。

このような家庭の子育てニーズに対し、保育所や保育士はその役割を担う存在として期待されている。児童福祉法において、保育士は「専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」と定められており、さらには「保育所に勤務する保育士は、乳児、幼児等の保育に関する相談に応じ、及び助言を行うために必要な知識及び技能の修得、機能及び向上に努めなければならない」とされている。つまり、現代のような子育て機能が衰退している家庭や地域社会において、保育士は、子どものみを対象に支援するのではなく、保護者に対して子育て支援を行うなど、子どもと保護者といった、その家庭全体を視野に入れながら包括的に支援していくことが求められている。

具体的な支援の内容や方法としては、保護者の子育ての相談に応じその不安の軽減や解決を目指すケースワーク、保護者同士の交流を促進し子育ての孤独感の解消を目指すグループワーク、地域全体で子育てを支援していくコミュニティーワークといった、様々なソーシャル

ワークの機能があげられる。

このようなソーシャルワークの機能を果たしていくためには、子どもや保護者の家庭生活全体を「アセスメント（把握や理解）」し、そこからニーズを読み取り具体的な支援へとつなげていくプロセスがソーシャルワークには欠かせない。しかし、実際の保育現場においては、こうしたアセスメントに基づいた支援につなげられていないのが現状である。こうした課題の背景としては、保育士自身にソーシャルワークの支援スキルが備わっていないことや、そもそもスキルを獲得するための教育が行われなかったことが根本的な原因として考えられる。

以上のような問題意識から、筆者はこれまで、保育士がソーシャルワークを展開していくために必要な「アセスメント」の技能及び習得を目的とした、アセスメント・ツール（教育支援ツール）の開発を行ってきた。

#### （2）研究の目的

本研究では、筆者が開発したアセスメント・ツール（教育支援・ツール）を、保育現場に従事している保育士を対象に試行し、ソーシャルワークに必要な支援スキルの理解につながるのか、さらに、実際の保育現場で有用性について、実践的展開において検討を行った。

### 3. 研究の結果

#### （1）研究の方法

保育に従事している保育士36名を対象に、保育現場における貧困家庭への支援に関する事例を用いながら、演習形式で実施した（表1）。研究協力者である保育士には、事前準備として、事例とアセスメント・シートを配布し、事例の熟読とアセスメント・シートの質問項目（96項目）に対し回答を行うよう依頼した。

表1. 演習プログラム

本研究のねらい（30分）	ワークショップ（45分）	まとめ（45分）
①演習の内容・進め方の説明	①グループで、事例についてのディスカッション	①グループごとの結果の比較検討と全体での振り返り
②ツールの使用方法の説明と操作	②グループごとにデータの入力と出力	②ツール試行に関するアンケートの記入

演習の展開方法としては、まず、グループを3名で構成し、演習（研究）のねらいや内容、進め方について説明したうえで、アセスメント・ツール（教育支援ツール）の使用方法や操作方法についての説明も行った。その後、各グループにおいて、各自が回答したアセスメント・シートをもとに話し合いをしながら、グループ内におけるアセスメント・ツールの入力作業と出力を行うよう指示した。そして、最後に、グループごとの結果の比較検討と全体での振り返りを行い（写真1・2）、アセスメント・ツールを試行した感想について、アンケートの記入を依頼した。



写真1. 全体での振り返りや感想など



写真2. 全体の総括

## (2) 研究の結果

表2に、研究協力者である保育士に依頼したアンケートの内容について示した。全部で13項目の内容についてたずね、1～11までの項目については「5. よくできた」「4. まあまあできた」「3. どちらともえない」「2. あまりできなかった」「1. できなかった」までの選択肢を示した。また、12と13の項目については「5. そう思う」「4. まあそう思う」「3. どちらともえない」「2. あまりそう思わない」「1. そう思わない」の5件法による選択肢を示した。

表2. アンケート項目

(1) ツールの利用により、保育ソーシャルワークの視点について理解できましたか
(2) 子どもやその家庭の生活を、グラフなどで見ることで、生活全体を理解しやすかったですか
(3) ツールの利用により、子どもやその家庭の生活状況や生活問題を、具体的に理解できましたか
(4) 子どもやその家庭の生活問題は、個人的な要因だけでなく、環境的な要因が関係していることを、ツールの利用により理解できましたか
(5) 1回目と2回目のアセスメント結果を通して、子どもとその家庭の生活の変化を理解できましたか
(6) 子どもやその家庭を支援していく際には、保育所や保育士だけでなく、地域や行政・専門機関までも視野に入れ、連携していく必要があることを、ツールの利用により理解できましたか
(7) 子どもやその家庭を支援していく際には、保育所内における情報共有や職員連携などの組織体制が必要であることを、ツールの利用により理解できましたか
(8) 子どもやその家庭を支援していく際には、保育所や保育士は子どもの権利を護るだけでなく、保護者との信頼関係や家庭を支援するための知識や方法が必要であることを、ツールの利用により理解できましたか
(9) グラフなどを見ることで、グループでの話し合いがしやすかったですか
(10) ツールを活用し、グループで話し合うことで他の人の考え方を受け入れたり、自分の意見との差異を確認したりすることができましたか
(11) 教員や他のグループとのアセスメント結果の差異（認識のズレ）を確認することで、他職種や他機関との連携の必要性を理解できましたか
(12) 今回の演習体験は、保育現場での実践に役立つと思いますか
(13) 支援ツールを、保育現場での実践として、取り入れることは有効だと思いますか

表3は、アンケート結果のうち、1から13までの質問の中で、上位2つの選択肢「5 よくできた」「4 まあまあできた」を選択し回答した者の割合を、全体としてまとめたものである。

少人数のアンケート結果であることから、統計的な正確さを示すことはできないが、アセスメント・ツールに対する評価について、全体的に高い評価（全ての項目において80%以上）を示していることがわかる。とくに、評価が上位の項目である「(2)」「(5)」「(6)」「(8)」は、家庭の生活を全体的に把握するための視点や実際に支援を展開していくうえで必要なスキルなど、ソーシャルワークにおけるアセスメントと支援スキルの理解が進んだと評価することができる。そして、「(9)」「(10)」の項目は、グループ内における話し合いに関する内容であり、メンバー間のコミュニケーションや互いの認識の違いを、アセスメント・ツールによって、その理解が促進されたと評価することができる。

以上のことから、アセスメント・ツールを活用した演習プログラムの現時点での成果としては、①子どもだけでなく、家庭の生活全体やその変容過程の理解ができる、②保護者との信頼関係や行政・専門機関などの社会資源を活用した支援の重要性についての理解ができる、③グループ内でのディスカッションを通じて、他者との認識の違いやその意義について理解できる、といった点にまとめられる。

これらの成果は、本研究が目的としていた、「保育士のソーシャルワークへの理解」が進んだと評価することができる。また、もう一方の課題であったアセスメント・ツールの有用性については（質問の「(12)」「(13)」）、それぞれ86.1%と比較的に高い評価を得ることができた。

表3. アンケート集計結果 (%)

質問No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
全体	86.1	100.0	86.0	83.3	100.0	97.2	88.9	94.4	97.2	97.2	86.1	86.1	86.1

#### 4. これからの展望

本研究におけるアセスメント・ツール（教育支援ツール）を活用した演習プログラムは、保育士がソーシャルワークのスキルを身につけるのに、ひとつの有効な方法であるとして評価された。このことは、今後、保育士がソーシャルワークのスキルを獲得していくための有効なトレーニング方法として提示することができる。

今後は、「保育ソーシャルワーカー」養成のための研修や保育士の養成課程におけるソーシャルワーク・トレーニングとしての新たなカリキュラム開発（テキストの作成）にも発展させていきたいと考えている。

#### 5. 社会に対するメッセージ

本研究で実施したアセスメント・ツール（教育支援ツール）は、子どもと家庭の生活全体や保育所や地域社会の環境状況などの多くの情報をコンピュータによって処理し、棒グラフやレーダーチャートなどで、その全体図を視覚的に把握することを可能にしています（図1）。

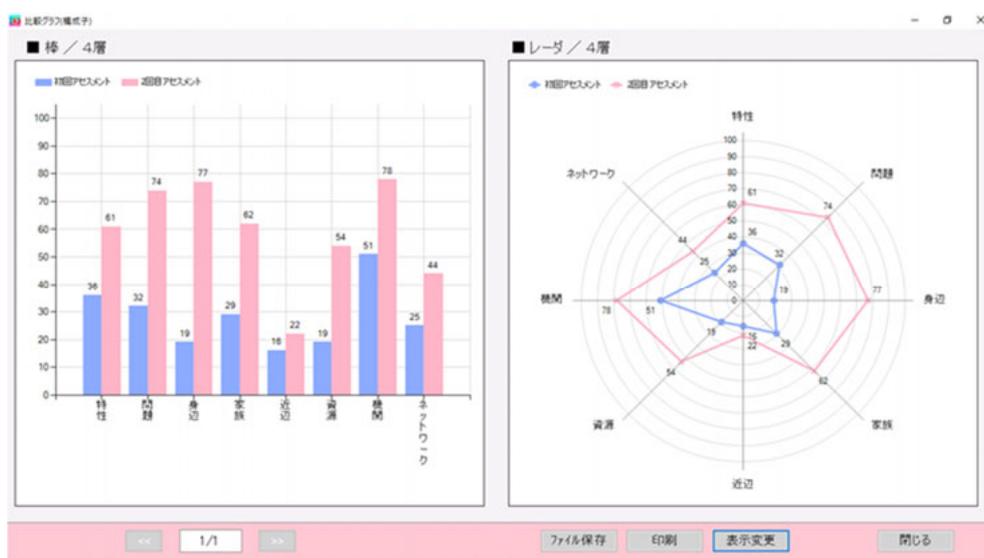


図1. アセスメント・ツールを活用した、家庭の生活全体の状況

近年、福祉現場においても、こうした ICT（コンピュータやインターネットなどの情報通信技術）を活用した支援に注目が集まっており、その利便性や機能性から、様々な福祉問題を解決するための支援活動として、どのように活かすことができるのかが課題となっています。そうした意味において、本研究は ICT を活用した研究であり、今後の福祉領域の実践レベルに応用していくための多くの成果や示唆が得られたと考えています。

今後も、福祉領域における ICT を活用した研究の発展のために、引き続きご支援をお願い申し上げます。

若手・女性研究者奨励金による研究を遂行していくなかで、現場で活躍されている多くの保育士の方々と交流することができ、そして、本研究への期待と激励をいただくことができました。本研究の意義をご理解いただき、研究助成をご支援いただきました日本私立学校振興・共済事業団および関係各位に心より御礼申し上げます。